涌出宮の神楽座

三　原　奈　美

祭りの見学にうかがうと、女性が供え物に触れることや、その準備をしている場所に近づくことを禁じている場合がある。一方で、神楽を舞う巫女や供え物を運ぶ女性など、祭りに欠かせない役割を担って女性が登場することもある。

京都府の木津川市山城町平尾の涌出宮（わきでのみや）では女性たちが集まって、神楽座と呼ばれる行事を営んでいる。

涌出宮は正式名称を和伎座天乃夫岐売（わきにますあめのふきめ）神社といい、平安時代の『延喜式』神名帳にも記載された古社である。

この神社の行事は、神楽座を含めて「涌出宮の宮座行事」として、昭和61年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けている。とくに２月の居籠祭（いごもりまつり）は、拝殿での饗応や御田植神事など、古式を伝える数々の儀礼が注目され、毎年多くの見学者が訪れる（写真１）。

写真１　居籠祭の御田植神事

秋祭りには、９月にアエーの相撲、10月に百味の御食（ひゃくみおんじき）が行なわれる。アエーの相撲では長老たちが神社に集まり、拝殿で神とともに食事をした後、子供たちが境内で相撲を奉納する。相撲の前に「アーエー、アーエー」と言いながら土俵で太刀を振る所作が、この名前の由来であるとも考えられている（写真２）。

百味の御食は栗や柿などの秋の収穫物を奉納する行事で、前日に供え物を盛り付けて拝殿に

写真２　アエーの相撲

写真３　百味の御食

置いておく（写真３）。行事の当日は長老たちが拝殿から本殿に並び、供え物を手渡しで供えていく。

涌出宮では特定の家々で構成された８つの祭祀組織があり、神社のそれぞれの祭りに関わっているが、このうち大座・殿屋座・岡之座・中村座の４つが秋祭りにたずさわってきた（中村座は現在活動を休止している）。

神楽座も秋祭りの組織に関わる行事で、かつては４座すべてで行なわれていたが（註）、現在は岡之座と大座のふたつがこの行事を伝えている。

岡之座では、春の彼岸の中日（春分の日）に神楽座が営まれる。午前中、岡之座の主婦たちが神社の拝殿に集まって席につき、宮司の祝詞奏上の後、ソノイチ（巫女）が神楽を奉納する

写真４　岡之座の神楽座

（写真４）。30分ほどの短い行事であり、近年までは中村座の主婦たちも一緒に参加していた。

神楽座の当番（トウヤ）は、毎年一軒ずつ決められた順につとめ、トウヤに当たった家では神前に供える供物を用意する。供物は、白米、煮物や卵焼きなどの鉢物、酒粕を煮て作った粕酒、ナゾラエモノ（擬（なぞら）えもの）である。ナゾラエモノというのは大根を男根形に削って先端に唐辛子を付けたもので（写真５）、奉書紙で包んで水引をかける。これはトウヤの主人がつくることになっているが、手先の器用な親戚や知人の男性に頼むこともあるという。子供を授かりたい女性が祭典後にこれを貰って食べると、子宝に恵まれるといわれている。

写真５　男根をかたどったナゾラエモノ

かつては神社での神事に先だって、岡之座の主婦たちがトウヤに招かれ、もてなしを受けた。トウヤの家に着くとまず床の間に飾られたナゾラエモノを拝み、家の主人に挨拶（かしわ）をして席に着く。そして鉢物や赤飯、時には鶏肉のすき焼きや仕出し屋の料理をご馳走になった。振る舞われた粕酒は砂糖を加えて味を調節し、大根の漬物を食べながら飲んだそうである。トウヤの主人が粕酒の給仕をし、女性たちをもてなした。食事が終わって午後３時ごろになると主婦たちが神社に参拝するが、現在と同様、トウヤの主人は参加しなかった。

一方、大座では、神楽座を営むのは春の彼岸入りの翌日と決まっていたが、現在は毎回日取りを決めている。

大座は年長者７人で構成される七人衆が中心になって組織を運営している。この七人衆への加入を控えた男性が、年長者から一名ずつ順番に神楽座のトウヤに当たる。神楽座のトウヤをつとめるということは、七人衆の候補者に入るという意味もあるため、この行事は“神楽入り”とも呼ばれる。

現在、神楽入りを行なうのは、だいたい30歳代の男性で、家族と神社に参拝し、御神酒を奉納している。

しかしかつては、神楽入りの息子とその両親が、大座に属する同姓の家々（“家筋”と呼ばれている）の主婦たちとともに神社に参拝していた。そのころは、神前に御神酒と“枡のめし”を供え、ソノイチに神楽を奉納してもらった。枡のめしというのは、枡の型に葉蘭（ばらん）を敷き、その上に御飯を入れて蓋で押したもので、同じ家筋の主婦たちが協力して作ったという。枡のめしは祭典後に同じ家筋にも配られ、受け取った家では、神楽入りを祝って、家族で分けて食べたそうである。

神社での神事が終わると、神楽入りの男性が、参列した主婦たちを家に招き、鶏肉のすき焼きや神前から下げられた御神酒でもてなした。御神酒の給仕は、神楽入りした男性やその父親がつとめたという。大座の神楽座には、七人衆への加入を前にして、今後大座を運営していく際にお世話になる女性たちをもてなすという意味合いが含まれているのだろう。

祭りの場では、女性に関する様々な禁忌がある一方で、裏方で働く女性たちの姿もよく目にする。裏方で支える女性たちを男性がもてなし慰労する神楽座の行事は、男性だけではなく女性も祭りを支えてきたことを、あらためて気付かせてくれる事例である。

註　京都府教育委員会『京都の田遊び調査報告書』1979年

文学研究科博士課程後期課程在学